

ところが、あの津波が来て堤防が全く役に立たず家が流されていく状況を見て、自然の許容する範囲でしか人間の暮らしはないのだと私たちは学んだ。明治より文化文明技術を進歩させれば、自然を人間の支配下におけると思いあがった感覚で自然と対峙していたように感じる。南海トラフ地震や首都直下型地震が懸念される今日、それらの学びをきちんと後世に伝えていくことこそ一番大切なのではないだろうか。

震災直後、あちらこちらを歩いて回り、高台踏査なども行なった。その中で、縄文遺跡が今回の津波の被害を免れて残っていることが分かった。かつてここで暮らしていたご先祖様は、津波の被害を受けることなく安全に暮らせる場所をきちんと知っていたのだ。我々は技術を持ったことで振り回されて、いつの間にか忘れてしまったことがあるのではないかと思う。日本の思想、宗教などは自然と共存するという考え方だが、西洋や中近東の考え方は神が優先して、人間が自然を支配するという考え方だ。私たちもそれを進歩だと思い込んできた。

震災を経験して、西遊記の冒頭が思い浮かんだ。自分たちはお釈迦様の手のひらで踊らされていた孫悟空だったのではないか。自然をコントロールできるなどという考えは人間のおごりだった。私たちの生命は、母なる地球環境とは別の惑星では生きられないと思う。自然と私たちの生活をどう折り合わせて、どう生きていけばいいのかが問われているのだ。

福島原発事故で故郷を失った人々がたくさんいる。この問題が何年後まで続くのかも分からない。気づけば日本には50もの原発があるが、これからのリスクを考えると本当にこれでいいのかを問わなければならない。私たちは今日より明日、

少しでも良い暮らしをすることを望んできた。それには多くのエネルギーが必要であった。原発を後押ししてきたのは、結局私たちの果てしない欲望なのだ。少しでも少ないエネルギーで楽しく幸せに暮らしていける社会にしていくことが大きな課題だと思っている。

震災を振り返って

幸せはGDPだけで図れるものではないと思う。生きていることの意味は、心の在り方にある。震災後、「絆」という言葉が多く使われていた。これまでの社会は人間関係が断ち切られたようだったのに、極限の状況は人々に生きているということ、人間関係など様々なことを考えさせた。皮肉にも震災が我々に気づかせたのだ。

環境保護とは自然を守ろうということではなく、私たちの暮らしを守るためなのだ。ご先祖様があって私たちがいる。そこには命のつながりがある。動物や植物も同じだ。私たちは、ご先祖様、動物、植物がこれまで地球環境を支えてくれたことに感謝しなければならないと思う。私たちの暮らしや幸せは自然の中でしか成立しない。持続する社会のために自然や文化を未来へ受け継ぐことが必要なのだ。人口の増加や経済の成長だけが良いことではない。人口が減少しても、経済が成長しなくても、その地域のいい面を見て、むしろ新たな生き方を発信していけるようになるべきだ。新たなライフスタイルや価値観の提案を、南三陸町からしていきたいし、南三陸町が全国の先進的なモデルともなり得ると考えている。ぜひ現場に来ることで、震災を自分の体験に近いものにしてほしい。きっと学ぶことが多くあるだろう。

個人

地名に込められた先人からのメッセージ。

大崎市

太宰 幸子 宮城県地名研究会

取材日 2012.09.20

日本地名研究所会員、宮城県地名研究会会長、東北アイヌ語地名研究会会長。2005年～2008年 河北新報社「地名の泉」土曜日執筆担当し、2012年TBS系列（JNN）サンデーモーニング「風を読む」地名と歴史などに出演。主な著作『みやぎ地名の旅』、『災害・崩壊地名～地名にこめた祖からの伝言』、『地名は知っていた 津波被災地を歩く<上>・<下>巻』他多数。

3月11日 14時46分

息子が住んでいる美里町桜木にいた。揺れが大き

く家屋からいつでも逃げることができるようにま
ず玄関や窓を開けた。揺れ始めてからずっと時計
を見ていたが強弱はあったものの20分以上揺れ

が続いていた。揺れが落ち着いた頃、鹿島台の自宅に車で戻ることにした。信号が止まり道路はいたる所に段差がありマンホールからは水が噴き出していた。ゆっくり1台ずつ譲り合いながら片道通行になっていたため大渋滞が発生していた。途中、松山町を通ると道路は盛り上がりとてもひどい状況だった。通常10～15分で着く道のりだが、あの日は2時間近くかかり、午後5時頃にやっとの思いで鹿島台にある自宅に戻ることができた。自宅に足を踏み入ると仕事場である書庫の中は足の踏み場がないほどたくさんの書籍が崩れ落ちていた。

停電、断水、もちろん携帯電話も繋がらない。幸い自宅の近くに井戸がある民家があり水を分けてもらうことができた。情報源はラジオだけだった。自宅に戻りすぐにラジオをつけた時、津波の被害がでていることを知った。大きな余震が続き、雪も降る寒い夜で不安が続く中、夜は明けていった。翌朝いつも見る風景を眺めていると、塩釜港の方に火災による煙が見えた。届くと思っていなかった新聞が届いていた。いつもと比べてとても薄い新聞を見て改めて被害の大きさを知った時は、知り合いのことや何度も地名調査で訪れた所を思い浮かべ、気分がとても落ち込んだ。

2人家族で米などの食料は何日間か凌げる程度の備蓄はあった。不足していた生活必需品は、農協で運営している商店で在庫販売してくれたおかげで非常に助かった。食料の値段も通常と変わらない値段で販売し、買占めをするような人もいなかった。田舎暮らしの良さを感じた瞬間だ。近所の人々が作ってくれた餅や煮物を分けてもらいに、空っぽのリュックサックを背負って1時間程かけて歩いて出かけた。帰りはリュックがいっぱいになるくらいに物資を分けてもらった。まるで戦後の買い出しをしているようだった。

自宅付近の集落では昔あったコミュニティが残っていて助け合いの心がこの非常事態にとっても心地よく感じた。

代表を務めている宮城県地名研究会の会員の方々の安否がとても気がかりだった。家に居るだけで気持ちが落ち着かなかったのが、3月13日頃に会員の方に手書きの手紙を13通ほど書いて、郵便配達がいづ復活するか分からない状況だったがポストに投函することにした。

震災から1週間後くらいに自宅の電話が通じるようになったときは、全国各地からの安否を心配する留守電が多数録音されていた。その後、手紙を見てくれた会員の方々から返信が届いた時はとても嬉しくほっとした思いだった。



震災後初の調査活動と支援活動

4月に自宅から一番近く甚大な被害を受けた東松島市の野蒜へ行った。ニュースで自衛隊が遺体捜索活動等をしていた事を知ったので、その活動の邪魔にならないよう心がけた。

野蒜に着き車を降りた瞬間、亡くなった人の思いや声も聞こえるように感じた。一度車に戻り気持ちを落ち着かせることにした。その当時の衝撃は今でも鮮明に記憶に残っている。自分の心の中で被災地に行つて写真を撮影し、地元の方に話を聞く事は間違いではないかと思うこともあった。非常事態の状況が続く中「何か人の役に立ちたい」と考えていたので、自分のブログで支援物資を全国から募ることにした。ブログを見た全国各地の方々から米やパンなど食料を大量に送っていただいた。当時、不足していた衣料品や生理用品なども広島や奈良など遠方の方々から送っていただき、被災地の知人に届けることができた。知人が支援物資へのお礼の手紙を書きたいが辞書がないので手紙を書くことができないと言っていたので、自宅にあった国語辞典を持って行ったところとても喜んでくれた。



撮影：2012.4.12 気仙沼市大島 お孫さんを亡くした女性が、扶られたり表土を剥がされ、砂地となった畑で馬鈴薯を植え付けるため草引きをしていた

鹿島台には吉田川と鳴瀬川が並行して流れているが、津波の跡が2つの川に残っていると聞いた。震災後の調査で野蒜海岸から13.5km遡上していたことが分かった。水の勢いの凄さを強く感じた瞬間だった。

宮城県地名研究会が設立されて早や20年になるが調査研究していて気づかされたことがたくさんある。それは地名に込められた「知られざる故里の歴史」の深さだった。文字に記されていない、歴史そのものだ。「故郷を知る手掛かりは、地名にあり」である。近年、古今東西を問わず、地震や大雨などによる自然災害が目立ってきている。目も耳も疑うほど、悲惨な災害が多いことも事実だ。その悲しさや惨さを、地名はしっかり伝えてきた。私たちは、その地名にもっと敬意を表し、先人が報せてくれている事実から目をそらさず、耳を傾けるべきだ。地名は、今そこであった事実だけではなく、古い時代にあった災害をも伝えている。地名調査を行なう事で地名に込められた先人の思いをもっと大切に、後世へ伝えるべきだという気持ちが震災によってより強い思いにもなった。

災害地名を調査するきっかけ

火山列島である日本は、自然災害の歴史が古くから続いている。どこに住めば安全なのか、そんな不安に駆られている方々もたくさんいると思う。地名には、自然災害で土地が壊れたこと、洪水で泣いたこと、泣かされたことが声なき声として伝えられている。特に美しくすてきだなと思われる地名は要注意であることがある。災害は忘れた頃にやってくる。地名は、まさに先人から受け継いだ大なる宝物だと思っている。

宮城県の多賀城に「螻蛄喰（けらくい）」という地名があり、その地名について残した著書があった。螻蛄（ケラ）があんまり沢山いて、その地区の土地を喰い荒らしたという言い伝えがあるという。自分ではその話がどうしても納得がいかなかった。今から20年程前、人々の自然災害に対する気持ちが変化してくるのではないかと考えたことが、災害地名を調べるきっかけになった。災害地名の具体例として登場する60ヵ所余りの住所はいずれも、自らの足で歩き、地元の人から話を聞き、地形を確かめ、地名と史災との関係を検証した。

自然災害の痕跡を残した先人からのメッセージ

災害に遭いやすい場所は、地名が伝えている場合があると言われている。仙台市青葉区の栗生地区

では、今回の震災で隣接する地区で地滑りが発生し、アパートの敷地に土砂が流れ込んだ。地元の話によれば、昭和20年代にも今回に似たような土砂災害が起こった。栗生の「栗」の発音が、災害の履歴を表している。「栗」のもとの発音は「くれ」で、土地が「崩れる」ことを表すという。この近くにある地名に「柿」のつく地名があるが、この「柿」は「欠ける」を意味し、土地が削り取られた場所などに見られる。

また、やはり近くに「梅」のつく地名もあったが、過去に土砂で土地が埋まったことを表している場合がある。つまり「埋め」が「梅」になった。地名は時代とともに、イメージのよい文字に変えられたが、由来をたどると土地の下の方を知る事ができる。もちろんすべての「栗」「柿」「梅」に当てはまることなく、その土地ごとに調べてはじめて分かることなので、誤解のないようにしていただきたい。

地名もまた、先人のメッセージとして受けとめるべきだ。崖崩れになりやすいから気をつけたほうがいいよと子々孫々に伝える、あるいは自分たちの仲間にも伝える、そういう意味を込めて地名がつけられたと思う。市町村合併や宅地開発で古い地名が消えていく時代、地名に込められた先祖の知恵、地名に隠された事実と歴史、その重要性を知ってほしい。

震災を振り返って

津波に襲われた三陸海岸を歩いていると、海は穏やかで青く美しい。まるであの日のことはなかったように思うこともある。いったいあれは、何だったのかと目を疑いたくもなる。

被災地を調査していると、いつも心が重くなった。今、私が足を置いている場所に、行方不明の方が早く見つけて欲しいと待っているのではないかという思いが強くなる。しかし、それでも、後世の人々にこの大きな震災からどのように復興し、どのように切り抜けたか、そしてどんなにこの東北、宮城県が美しかったかを伝えなければならない。そしていつかみんなが笑顔の日がやってくると信じている。そのためには私たち一人ひとりが助け合い、できることから小さな一歩を歩んでいきたいと思う。

津波災害と地名のつながりを調査していて、浜の人々の信仰心の篤さに触れる機会がたびたびあった。海と共に生きて来た人々の心の奥深さをも知ることができた。

どうか少しでも早く、以前の元気な東北、宮城県になって欲しい。みんなが笑顔で暮らすことができ、故郷を離れたりしないような穏やかな生活の日々が戻ってくるように切に思う。